

「特別活動」の実践的指導力育成の取り組みについての検討[†]

—教員養成学部における「特別活動論」の授業実践を通して—

山岡 正典・林崎 勝・小池 孝範*

秋田大学教育文化学部

児童生徒に「生きる力」を育むことをねらいとしている現在の学校教育において、児童生徒の自主的、実践的な態度を育てることを目標とする「特別活動」の役割は重要である。しかし、学校を取り巻く様々な環境の変化によって、先輩教師からの指導技術の伝承が困難な状況が指摘されている。そのため、大学での養成段階において、一定程度の実践的指導力を育むことが求められている。

こうした課題に対応するために、「特別活動論」（特別活動の指導法）の中で実施している四つのステップにしたがった授業の実践について提示するとともに、その成果の検証と課題についての検討を行なった。検討の結果、ステップをふんだ授業によって、学生の実践的指導力を育成するという点において、成果があったことがみとめられた。ただし、本授業の中で身につけた実践力を、教育実習等の具体的場面の中で、さらに高めていく必要があることが課題として明らかとなった。実習に係わる指導と連携しながら、実践力をさらに高めていくための取り組みについて検討を続けていきたい。

キーワード：特別活動、実践的指導力、生徒の主体性、話し合い活動、段階的学び

1 はじめに——研究の背景と目的

平成10（1998）年に告示された「学習指導要領」（高等学校は平成11年）以降、平成20・21年の改訂、平成29年の改訂においても、一貫して「生きる力」を育むことが学校教育におけるねらいとして目指されている。「生きる力」の具体的内容としては、平成8（1996）年の中央教育審議会答申の中で、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力」、「自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性」、さらに、「たくましく生きるための健康や体力」であり、「これらをバランス

よくはぐくんでいくことが重要である」とされているが、こうした内容は、特別活動の目標と重なるところも多い。

例えば、現行の平成20年告示の『中学校学習指導要領』では、「特別活動の目標」として、「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う」が示されており、「生きる力」のうち、「課題発見、問題解決能力」、「豊かな人間性」の育成と密接な関連がある。

このように、学校教育において特別活動が果たすべき役割は大きいですが、その一方、「近年、全国的に若手教員の増加傾向が見られるとともに、特別活動には教科書等の教材がないことなどから、先輩教員からの指導技術の継承が円滑に行われなかったり、特別活動の教育的意義が十分に理解されなかったりするなど、特別活動の学習が必ずしも効果的に行わ

2017年11月14日受理

[†]On Efforts to Train Students for Practical Teaching Abilities of “Special Activities”

*Masanori YAMAOKA, Masaru HAYASHIZAKI and Takanori KOIKE, Faculty of Education and Human Studies, Akita University

れていないという課題が散見」されることが指摘されている〔国立教育政策研究所 教育課程研究センター, 2016〕。

平成27(2015)年の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」では、「若手教員の増加傾向」等について〈学校を取り巻く環境変化〉として取り上げ、「近年の教員の大量退職, 大量採用の影響等により, 教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め, かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり, 継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど, 早急な対策が必要である」と危機感をもって指摘されている(3-4頁)。

ここでは、「研修の充実」などの環境整備が提案されているが, 同答申では, 養成段階を「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であることを認識する必要があることを示した上で, 「子供たちに, 知識や技能の修得のみならず, これらを活用して子供たちが課題を解決するために必要な思考力, 判断力, 表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育む指導力を身に付けることが必要である」としている(16頁)。

以上の点をふまえるならば, 養成段階においても, 「子供たちが課題を解決するために必要な思考力, 判断力, 表現力及び主体的に学習に取り組む態度を育む」ために重要な位置づけとなっている「特別活動」における実践的指導力を学生が身に付けることが求められているといえるだろう。

しかし, 「特別活動」の現状について, 平成28(2016)年8月に出された中央教育審議会, 初等中等教育分科会, 教育課程部会, 「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて(報告)」において, 「特別活動に関する指導力は, 小・中・高等学校いずれにおいても全ての教員に求められる, 教員にとって最も基本的な専門性の一つ」でありながら, 「領域として設定されている特別活動は, 専門の免許がなく, 養成段階で専門の課程がないことから, 教科に比べ専門性という点において軽く見られがちである」ことが課題としてあげられている。さらにその改善のため, 教員養成課程において, 「特別活動の意義, 学校の教育活動全体における特別活動の役割, 指導方法等の本質について, しっかりと学ぶようにすること」が必要であるとしている。

同報告では, 「これまで特別活動の成否は, ややもすると, 指導する学級(ホームルーム)担任の個性によるところが大きく, このことは特別活動に対する指導方法や評価方法の理論的な研究」が十分になされてこなかったことを指摘する。

本研究は, 以上のような特別活動に対する社会的要請や, 特別活動の指導上の課題に対する指摘をふまえ, 「教育職員免許法施行規則」に示されている「特別活動の指導法」に関する科目での実践的な指導力を育成するための取り組みについての成果と課題を検討することを通して, 特別活動に対する指導方法を育成するための効果的なプログラムのあり方について検討していきたい。

秋田大学教育文化学部では, 現在, 小学校の教員免許状対象の「特別活動論Ⅰ」(1単位), 中学校・高等学校の免許状対象の「特別活動論Ⅱ」(1単位)として, 実践経験豊富な, いわゆる実務家教員と連携して開講している(標準履修年次2年)。その中では, 指導案を作成し, 模擬授業を行なうことを通じて, 「特別活動」の実践的な指導力の育成を図っている。

「特別活動」に対する学生の実態として, その内容についての認知度の低さが指摘されている〔磯島, 2014:153〕〔松田, 2017:149f.〕。その背景としては, 特別活動の活動内容が多岐にわたること, また, 児童生徒の「自主的, 実践的な活動」を主とするという特質をもつ特別活動は, 学生の児童や生徒としての経験からは, 教員の指導計画や指導上の配慮等が見えにくいことなどがあげられるだろう。実際, 「特別活動論」の授業においても, その当初は特別活動における指導計画や指導上の配慮など教員の役割については, 具体的なイメージをもちにくい学生が多かった。

そのため, 「各教科の指導法」とは異なり, 特別活動における諸活動の背景となる指導計画や指導上の配慮等を, 学生に意識づけることから始める必要がある。そこで, 具体的な指導計画の作成に向けて, 「目標及び内容」の理解に加え, 指導案作成・模擬授業の実施に向け, 段階をふんだ指導, 具体的には, 「学級活動の授業づくり」に向けて, 四つのステップ——「ステップ1: 本時と前後の関係を知ろう」, 「ステップ2: 指導案から授業づくりを学ぼう」, 「ステップ3: 参考例の中から題材を一つ決め, 指導案を作成しよう」, 「ステップ4: 指導案を作ろう」(模

擬授業を含む)」——にしたがった指導を行なっている。

以下では、その具体的展開を提示し、特別活動における実践的指導力を育成するためのあり方を振り返り、授業の実際と評価をあわせて検討していくことを通して、特別活動に対する指導方法を育成するための効果的なプログラムのあり方について検証していきたい。

2 「特別活動論」の実践とその考察

本稿では、平成20年告示の中学校学習指導要領に示されている〔学級活動〕の内容のうち、「(2)適応と成長及び健康安全」と「(3)学業と進路」を題材とした授業づくりについて、「特別活動論Ⅱ」での具体的な取り組みを紹介したい。

(1) 本取り組みのねらい

現行の平成20年度改訂『中学校学習指導要領解説特別活動編』(以下、『特活解説』と略記、以下「学習指導要領」及び「同解説」からの引用については、文部科学省HPによる。)では、特別活動と各教科との関連について、特別活動では、「日常の各教科の学習で獲得した知識・技能、能力や態度」を生かしながら、生徒の自主的、実践的な活動」の充実を図ると同時に、「特別活動で培われた自主的、実践的な態度が、各教科の学習に影響を与える」ことが示されている。

その上で、「特別活動における集団活動においては、…中略…話し合い活動、言語等による表現や発表などが重要」であり、「また、活動の企画・立案を行ったり、調査を行ったりすることもある」が、「こうした活動の基礎となる能力は、国語科や社会科をはじめ各教科の学習を通して培われていく。他方、特別活動における自発的な実践活動によって各教科で培われる能力が発展的に一層高められたり、深められたりする」ことなどを、例としてあげ、「各教科と特別活動はともに支え合い、相互に補い合う関係にある」ことを示している。

「さらに、各教科の学習の場面の背景にある、日ごろの教師と生徒及び生徒相互の人間関係」のあり方によって「各教科における学習の在り方も大いに左右される」ため、「学級等における温かな雰囲気と人間関係づくり、規律ある学習態度や自主的な学習習慣を育てる指導など、学習の場としての学級づくり」が「各教科における主体的な学習活動の充

実を図る」ために重要であるとされている(『特活解説』17-18頁、下線部引用者補足)。

こうしたねらいをふまえ、「生徒が主体的に話し合い活動」を行い、その「話し合い活動を通して、人間関係を深める」ことにつながる授業を学生が構想できることを目標とし、授業を行なった。

以下、「学級活動の授業づくり」に向けた、四つのステップにしたがった授業の具体的流れについて紹介していきたい。

(2) ステップにしたがった取り組みの実際

授業にあたっては、まず、授業づくりの前提となる「①生徒主体の話し合い活動にするには」、「②話し合い活動で人間関係を深めるには」の2点について、以下の①②に示す留意点を伝えた。

① 生徒主体の話し合い活動にするには

生徒主体の話し合い活動は、生徒が主体的に取り組める切実感のある活動テーマの選定が前提となる。そのため教師は、アンケートを実施したり、学校生活における生徒の様子を観察したりすることで、生徒が課題と感じていることを把握した上で、活動テーマを選定することが必要となる。また、生徒に対しては、活動テーマに対する問題意識、改善意欲を高めることが必要となる。

② 話し合い活動で人間関係を深めるには

人間関係を深める話し合い活動を行うためには、互いに自分の考えを自由に表現できたり、認め合い高め合うことができたりするなど、学級内に「支持的な風土」が醸成されていることが前提となる。そのためには、「なぜ話し合うのか」を全員が理解して話し合いに臨むことが大切である。

活動テーマ設定の理由を全員が理解するために、以下のようなことを取り上げていく。

- ・生徒の日常生活の現状や実態を的確に把握
- ・話し合う必要性のある活動テーマであること
- ・問題の焦点化を図ること

こうしたことを取り上げることによって、生徒が課題意識や切実感を持つことにつながり、話し合いが深まり人間関係も深められていく。

このことを理解した後、各ステップに沿って授業作りへと進んでいった。

【ステップ1】本時と前後の関係を知ろう

本授業実践では、〔学級活動〕の内容のうち、「(2)適応と成長及び健康安全」と「(3)学業と進路」を取り上げ、【ステップ1】として、教師の関わり方や

授業における活動過程を次の表として示した。

〈提示教材〉

内 容	(2)「 <u>適応と成長及び健康安全</u> 」 (3) <u>学業と進路</u>
活動の特質	集団での話し合いを通して、 <u>個人の目標を自己決定し、個人で実践する自主的、実践的な活動</u>
教師の関わり・配慮	話し合い活動における、問題の意識化、原因の追究把握、解決や対処の仕方の自己決定などについては、 <u>教師が中心になって指導するが、場合によっては教師の指導と生徒の自主的な活動を組み合わせる</u>
本時の指導案	○題材名 ○生徒の実態と題材設定の理由 ○事前の指導 （本時に至るまでの活動の流れ）
指導計画に示す内容	○本時のねらい ○指導過程（本時の展開～導入・展開・終末） ○使用する教材・資料 ○事後の活動 ○評価の観点
授業における活動過程	<u>※集団思考を生かした個人目標の自己決定</u> ①意識化～問題の状況を明確にする ②共通化～個人の実態に即した共通な問題 ③原因追究～原因を明らかにする ④解決策～集団思考により解決策を見出す ⑤個別化～実践方法を自己決定する ⑥実践化～実践意欲をもつようにする

学級活動においても、各教科や他の領域と同様、全体計画や各活動の年間指導計画に基づいて学級ごとの年間指導計画や1単位時間の指導計画を作成することが必要である。しかし、特別活動の場合には、各教科の指導案とは異なり、「単元」のまとまりがないこと、また、「教師の適切な指導」が前提とはなるものの、あくまでも「生徒の自発的、実践的な活動」として展開される必要がある。

学生は、これまで各教科の指導案については作成しているものの、特別活動の指導案作成では、それとは異なった点がある。そのため、特別活動の特質や、教師の関わり・配慮といった各教科の指導との違いを意識した指導についての説明を行った上で、本時の指導案作成上の留意点、授業における活動の過程についての説明を実施している。

【ステップ2】指導案から授業づくりを学ぼう

【ステップ1】で、特別活動の特質をふまえた教

師の関わり方や活動過程についての理解を図った上で、【ステップ2】では、以下のように指導案を例示し、指導案および授業の展開についての具体的なイメージをもつことができるようになることをねらいとしている。

その際、「④本時の展開」の中に空欄を設け、【ステップ1】での理解をもとに「活動内容」と「指導上の留意点」の理解が深まるようにしている。

〈提示教材〉

1年2組学級活動指導案

指導者 ○○ ○○

1 題材名「学習の仕方を身に付けよう」

2 主題設定の理由

中1の最初は、学校生活の中でいろいろなことが新鮮で、授業へも積極的に参加している生徒が多い。しかし、部活動や委員会活動等で毎日の生活が忙しくなり、疲れもたまってくると、家庭学習がおろそかになったり…（略）…

3 本時の指導と生徒の活動

①活動のテーマ「学習の仕方を身に付けよう」

②本時のねらい

自分の学習方法を振り返り、学校の授業や家庭学習の仕方について、自分に合う学習方法を見つけることができる。

③事前の指導と生徒の活動

ア 学習の悩み（授業・家庭学習）を記入するアンケートをする。（帰りの会）

イ アンケート集計をして悩みの焦点化を図り、資料を作成する。（放課後、学級活動委員会）

④本時の展開

活動の内容	指導上の留意点	評価：資料等
1 先生の話聞く。 2 アンケート結果の発表を聞く。 3 委員会のロールプレイ「A君の授業」を見る。	・最近の様子についてふれる。（よい点と課題） ・委員会代表が発表する。 ・現在の学級の授業の課題について確認する。	：提示資料 ・自分の課題と関連させて感想を書いている。 （シート観察）
4 ロールプレイを見た感想を記入し、発表する。 5 <input type="text"/>	<input type="text"/> ・進路学習プリントに感想をメモさせる。	

6 各班から出された解決策を参考に、自分の決意を掲示板上に記入する。		： 掲示用の用紙
7		
8 決意発表	・ 発表を聞きながら各教科ごとの勉強法について参考になるところをメモさせる。 ・ 数人に発表させる。	
9	・ 日々の努力の積み重ねについて、後日状況報告の機会を持つ。個々の頑張りへの期待を伝える。	・ 自分の学習方法も決意をもって述べている。 (シート観察)

「④本時の展開」の空欄に当てはまる文を選択し、書き込もう。

活動の内容	指導・援助の留意点
・ 積み重ねの大切さについて先生の話聞く。 ・ A君へのアドバイスを各班で話し合い、班の代表が発表する。 ・ 机間指導で頼んでいた数名が、各教科の勉強法を発表する。	・ 掲示用の用紙にマジックで記入し、それを教室に掲示しておくことを伝える。 ・ A君の授業の様子を再現して、それを基にみんなで考えていくことを説明する。

以上の学習過程で、学生は指導案に基づいて、学級活動の展開について具体的なイメージをもつことができるようになってくる。ただし、本講義の標準履修年次である2年生段階では、まだ実習をしておらず、具体的なイメージをもちにくい学生もいる。そのため、机間指導を通じて、学生自身の経験を振り返り、イメージ化できるように促している。

【ステップ3】 次の参考例の中から題材の一つ決め、指導案を作成しよう

【ステップ3】では、〔学級活動〕の内容の「(2)適応と成長及び健康安全」と「(3)学業と進路」に関するいくつかの参考例を提示し、その中の題材について学生が検討し、題材の決定を行い、指導案（略案）を作成する。

ただし、学級活動は、「生徒が学級や学校で当面する生活上の様々な問題を取り上げること」が必要であるため、授業者の教育実践の経験をもとに「題材名、ねらい」と「主な学習活動」の（例）を示して、「学校に実態や生徒の発達段階」について、一

定程度の枠組みの提示を行っている。そのため、【ステップ3】では、指導案の略案を作成し、指導案全体についての概略の理解までをねらいとし、【ステップ4】での具体的な指導案（細案）作成につながれるようにしている。以下に、【ステップ3】での参考例を示す。

以上の三つのステップの後、実際の指導案を作成することとした。

〈参考例〉

(2) 適応と成長及び健康安全	
●題材名	・ねらい (例) 主な学習活動
●係活動を充実させよう。 ・ 役割分担の意義を理解し、自ら仕事を見出す。	・ 事前の各係の自己評価結果を見て課題を見つける。 ・ 各係で学級のためになる活動内容や方法を考える。 ・ 「〇〇係宣言」を発表する。 ・ 係活動の充実のために、自分でできることを決める。
●不安や悩みを解消し中学校生活を有意義に過ごそう(4月当初)。 ・ 夢や希望をもって中学校生活を有意義に過ごそうとする態度を育てる。	・ 「不安に思っていること」「どんな学級にしたいか」のアンケートを見ながらこの2点について話す。 ・ 「どんな学級にしたいか」を話し合う。 ・ 「どんな中学生になるべきか」考える。 ・ 目標を自己決定し、シートに記入する。
●メールやSNSのトラブルを解決しよう。 ・ 情報モラルに関する意識を向上し、良好な人間関係を築く。	・ 事前のSNSに関するアンケート結果を見る。 ・ SNSの利便性や問題点について意見交換する。 ・ SNSとの望ましい関わり方について自己決定する。
●男女が協力できる学級にしよう。 ・ 男女が互いを尊重し、協力できる態度を育てる。	・ 男女の協力に関する意識調査結果を見て、学級の状況を共有する。 ・ 男女の協力について気付いたことを黒板に出し合う。 ・ 男女のよりよい協力のために、各自が気を付ける点を話し合い、各自の実践目標を設定する。
●自転車の安全な乗り方を考えよう。 ・ 安全確保ができるよう交通ルールやマナーを守る。	・ 自転車でヒヤッとした体験の実態調査結果を読み、問題点を見つける。 ・ 問題解決のための話し合いをし、安全な乗り方に関して自己決定する。

●望ましい「異性との関わり」を考える。 ・異性との適切な関わり方や行動ができる。	・養護教諭との連携で実施した調査結果から、気付いたことや考えたことなどを話す。 ・「異性との関わり方」について養護教諭から話を聞き、責任ある行動について話し合う。 ・これからの行動の仕方についてノートに書く。
---------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------------------

(3) 学業と進路	
●題材名 ・ねらい	(例) 主な学習活動
●職場体験から学んだことを発表しよう。 ・働くことの楽しさや価値を見いだしてこれからの生活に生かす。	・事前に記入するワークシート内容 「職場体験の感想、職業に関する適正や自分の適性、職場からの聞き取り内容、働くことの意義」 ・ワークシートの発表とそれに関する質問をする。 ・授業で学んだ「これからの自分が取り組むこと」等。
●学校図書館を活用しよう。 ・グループ対抗書評合戦を通して、図書室の積極的な活用につなげる。	・事前に全員が行う書評の仕方の連絡をしておく。 ・図書係が、書評合戦のルールを説明する。 ルール：小グループになり一人5分以内で本の紹介をし、「どの本を読みたくなったか」を基準に代表を選ぶ。 ・代表者で書評合戦を行い、学級ベスト3を選ぶ。
●自分のよさを生かせる職業は何か。 ・自分のよさに気付き、将来や職業への興味・関心をもつ。	・事前指導「自己理解チェックシート」から自分のよさ、「職業特色シート」から就いてみたい職業の特色について考える。 ・ペアになり相手のよさを考え、合っていそうな職業を幾つか選び、その理由を伝え合う。 ・自分のよさを生かした具体的な目標や内容を自己決定する。

【ステップ4】 指導案を作ろう

【ステップ1】から【ステップ3】の過程をふまえて、最後に指導案の作成を行う。指導案作成のための手順として次の三つを示した。

- ①はじめに、第何学年にするかを決め、指導する題材を一つ決める。
- ②次に、別紙の「本時案」を作成する。（必要に応じて

て、事前指導や事後指導を入れる。）

③近くの人からアドバイスをもらい、取り入れたり修正したりしてよりよいものを目指す。

学生たちは、【ステップ1】から【ステップ3】で検討してきた学級活動の内容の「(2)適応と成長及び健康安全」、 「(3)学業と進路」のどちらかの指導案の作成をした。7割ほどの学生は、「(3)学業と進路」について作成した。

指導案作成後に、学生は6～7人のグループを作り、グループ内で指導案の検討を行なった上で、グループから1点の指導案を選んだ。さらによりよい指導案になるよう協議し修正を図り、その後、修正した指導案をもとに模擬授業（授業の前半15分程度）を実施した。

(3) ステップにしたがった取り組みの成果

以上、「特別活動論Ⅱ」の授業の中での具体的取り組みについてその概略を示したが、以下では、その成果となる指導案と模擬授業について、「①作成された指導案の紹介」、「②指導案の特色」、「③模擬授業の様子」として紹介した上で、「④成果と課題」の検討を行いたい。

①作成した指導案

以下に、学生が作成した指導案の3点を記載する。学生が作成した指導案は、その内容から三つのパターンに大別できたが、三つのパターンの中からそれぞれ1点ずつ、①模擬授業の提案を実施し、②本論文で検討する四つのステップの前提となる活動の目標及び内容について一定の理解がみとめられ、③段階をふんだ指導の成果と課題が見えやすい3点を選定した。

【指導案1 2年次 MO生】

- 1 題材名「職場体験から学んだことを発表しよう」
- 2 本時の指導と生徒の活動

①ねらい 働くことの楽しさや価値を見いだして、これからの生活に生かすことができる。

②事前の指導と生徒の活動：職場体験の感想、働くことの意義等のワークシートを記入させる（放課後）

③本時の展開

活動の内容	指導上の留意点	評価 資料
1 本時の授業の流れを聞く.	・事前にワークシートに記入させたものを基に、授業づくりをしていくことを伝える.	
2 各代表が発表する.	・自分と違う職場に行った人たちの感想を聞かせる. ・質問があった場合は指名する.	進んで質問しようとする.
3 グループワークをする. ①全ての職場に共通していたことは何か. ②これからの学校生活で、この体験をもとに生かせることは何か.	・自分の職場での取組を改めて振り返るようにする.	意見を交換している.
4 グループ発表 ・どこも一生懸命働いている ・常に意識を高く明るく頑張りたい	・黒板に書き出し、複数出た意見には赤丸を付ける.	働く価値を見だし、今後の生活に生かそうとしている.
5 本時の振り返り	・発表やグループワークで気付いたことを振り返らせる.	

【指導案2 2年次 JF生】

- 1 題材名「自分のよさを生かせる職業は何か」
- 2 本時の指導と生徒の活動
 - ①ねらい 自分をよく理解し、将来への見通しや職業への興味・関心をもつ.
 - ②事前の指導と生徒の活動
 - ・自分のなりたい職業について考えてくる.
 - ③本時の展開

活動の内容	指導上の留意点	評価等
1 本時の授業の流れを聞く.	・事前にワークシートに記入させた	
めあて：自分に合った将来の職業はなにか		
2 「自己理解チェックシート」に取組み、「職業特色シート」と比べる.	・周りとは話さず、一人で取り組むように指示する.	「自己理解チェックシート」「職業特色シート」
3 自分にはどんな職業が合っているのか確認する.	・シートを見比べて気付いたり分かったことを考えさせる.	

4 4人グループで発表し合う	・「自分のなりたい職業」「シートから分かった自分に合っている職業」「そこから考えたこと」の3点で発表する.	評価 自分の考えをもって話し合いに参加している
5 グループの発表を聞いて考えたことを話し合う.	・グループの意見を集約して発表できるようにする.	
6 授業を振り返る.	・振り返りシートに自分の考えをまとめる.	評価 自分の考えをもつことができています.

【指導案3 2年次 MS生】

- 1 題材名「将来を見据えて自分を見つめ直そう」
- 2 本時の指導と生徒の活動
 - ①ねらい 自分のよさや足りないところに気づき、将来を見据えて今からできる目標を考えることができる.
 - ②事前の指導と生徒の活動 (なし)
 - ③本時の展開

活動の内容	指導上の留意点	評価等
1 職業選択をする時に何を基準にして考えるか発表する.	・自分のよさを生かせる職業を選ぶという考えを取り上げる.	
2 4人グループになり、相手のよさをワークシートに記入し合う.	・多様な視点から自分のよさについて考えるために、男女混合のグループにするなどメンバーを工夫する.	評価 友達の見ても参考にして自分を見つめ直し、書いている.
3 自分の進路に生かせることと足りないことをワークシートに記入する.	・自分が考える自分のよさと、友達に教えてもらったよさを照らし合わせながら考えさせる.	評価 将来を見据えた目標を意欲的に書いている.
4 将来のためにどんな行動をしていくべきか、目標を提示用の用紙に記入する	・「強い意志と努力に優る適正はない」ということを伝える.	
5 目標を発表する	・内容の異なった数名に発表してもらう.	
6 先生の話聞く.	・将来を見据えて行動することの大切さを伝える.	

②作成した指導案の特色

例1の指導案は、「職場体験」を取り入れた学習である。進路に関する指導の中で、職場体験の事前、あるいは事後の学習を計画した学生が最も多かった。これまでの中学校や高校での職場訪問の経験が記憶に新しく、そのことを素材にした計画を立てやすいという点によるものと考えられる。具体的体験が印象に強かったせいか、職場体験を通して確かな何かを考えさせるといことがやや不明瞭になっている指導案が目についた。

例2の指導案は、自分のよさと職業との接点を見つめたり、気付かせたりする学習計画である。「自己理解チェックシート」や「職業特色シート」の活用を図っているように、客観的な資料を生かして自己の考えを広げ深めようとしている。シートの結果と自分自身との関係を小集団の中で伝え合うことで、学習者が互いに見方や考え方を一層広げ深めようとする意図が指導計画の中から見て取れる。

例3の指導案は、自分自身のよさを再確認することや、それを一層生かしていくため、今後の生活の仕方の中で、何かを気付かせることをねらっている。職業を考えるを通して、自分自身の向上を目指すことに重点を置いていることが大きな特徴である。職業について真剣に考える時こそ、自分自身の成長を振り返る大切な機会であることをよく理解しているからこそ、このような指導案を作成できるのであろう。

③模擬授業（授業の前半15分前後）の提案

発問や板書等をグループでアイデアを出し合い、模擬授業の提案を行った。指導案1, 2, 3の模擬授業の様子は次の通りである。

【指導案1】

- ・授業に対する興味を引きつけようとする教師役の最初の発言は、よく工夫されていた。
- ・前時のワークシートに記載したことを発表することから始まる授業であるが、職種が異なることや、気付きの異なる点などを考慮し、学びの内容を広げようとしている工夫があった。
- ・子供役の発表から、学習を深めるためのキーワード等を板書することで、ねらいに添った焦点化が可能であったが、適切な言葉を即座に板書することは難しいことであった。

【指導案2】

・シートの作業結果から、自分自身を客観的に見ることができるといよさを積極的に取り入れた授業は、子供たちにも十分受け入れられることが予想できた。

・「自己理解シート」や「職業特色シート」を活用する授業構成であるが、導入の場面で、単なる授業の流れの説明から入ったことは、工夫が足りなかった。

【指導案3】

・授業の始まりを、T1T2で役割演技から入ったことは、学習する側にとって直感的に今日の学習課題を意識化する有効な方法であった。

・グループワークが、4人1組になることや、男女混合になることなど、偏りのないメンバー構成になるよう気遣っていた。

・作業シートを用いず、級友からみた自分をグループ協議に取り入れるなど、人間関係を効果的に生かそうとしていた。

・友達から伝えてもらった自分の良さを、自分の職業選択に直接生かすことに結び付きにくいという点があることが、十分に考慮されていなかった。

④取り組みの成果と課題——【指導案】1, 2, 3および模擬授業に共通して見えること

「特別活動論」の授業は、「生徒が主体的に話し合い活動」を行い、その「話し合い活動を通して、人間関係を深める」ことにつながる学級活動の授業を学生が構想できることを目標として実施してきた。この目標がどれほど達成され、いかなる成果があり、また課題があるのかについて、ここまで①～③として紹介してきた内容をふまえて検討したい。

まず、成果についてであるが、授業の構成に関しては、基本的なことは理解できている。このことは、学部内の他の授業で指導案作成や模擬授業を経験していることによることが推測できる。

また、「【ステップ1】特別活動としての学級活動における教師の関わり方や授業における活動過程の理解」から、「【ステップ4】指導案作り、導入部分の模擬授業の演示」に至るまでが一連の実践的な学びとなるよう授業を計画した。特別活動の授業について、指導のあり方を検討することは、学生全員にとって初めてのことであったが、学生たちは、個人でもグループにおいても、実践的な場面、生徒の姿をイメージしながら、授業の組み立てに大変意欲的に取り組む姿がみられた。その中でも特に、興味を

引き付けようとする発問については、指導案、模擬授業のいずれにおいても様々な工夫がみられた。

本授業実践では、学級活動について四つのステップをふんで、体系的に実践的な内容につながる工夫をしたが、このことによって、授業の当初にはあいまいだった、特別活動における指導計画の目的や意義についての理解が深まった様子が、指導案や模擬授業を通じて看取された。

具体的には、児童・生徒の「自主的、実践的な活動」を特質とする特別活動の意義をふまえ、主体的な活動につながる発問や学習活動を促す工夫が見られると同時に、授業構成について、すでに実施した他の授業での指導案作成や模擬授業の経験を生かしていた点である。こうした点からは、学生たちが、各教科等との共通点を理解し、それを生かしつつも、特別活動の特質である主体的な活動となるような指導上の配慮に気づき、工夫をするという前向きな学びを行っていたと考えられる。

ただし、課題も見えてきた。第1に、発問に対する反応が、複数反応を予想することがなく、単線型の授業を構想するのみにとどまっており、子供役の学生の発言をどのように生かすかについては、非常に初歩的なレベルである点である。学級活動においては、「生徒が学級や学校で直面する生活上の様々な問題を内容として取り上げる」必要がある（『特活解説』44頁）。それは、授業における「活動のテーマ」の設定や、発問を考える際に重要であるが、学級活動の中での生徒の発言から、新たな問題を見出すこともあることを考えれば、発言を生かすことについても配慮していくことが求められる。

第2に、板書計画を立案しての模擬授業であったが、タイミングや板書の位置などについては、まだ不十分な点が散見された。学級活動における板書については、各教科に比べ、ややもすれば軽視されがちであるが、活動テーマ、話合いのテーマを共有するため、また、話合いの流れを整理し、可視化する上で重要な意義をもつものである。模擬授業の際に指摘はしたものの、ステップの中でとり上げ、板書の意義等への理解を深めることも必要になるだろう。

学生は、これから教育実習に臨み、実際の場面を経験することになる。本授業での学びを通して得た成果と、模擬授業等を通して見えてきた課題を基に、より実践的な学びを続けていくことを期待したい。

3 おわりに——今後の課題

以上、特別活動における実践的指導力を育成するためのあり方を振り返り、授業の実際とその成果と課題について検討してきた。

2の(3)の「④取り組みの成果と課題」でふれたように、ステップをふんだ取り組みは、学生の実践的指導力を育成するという点において、一定程度成果があったといえる。

ただし、見えてきた課題もあった。養成段階で求められる「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的」な資質能力について身に付いていると評価できるものの、発問に対する反応や板書等の実践においてはまだ初歩的なレベルにとどまっている点である。このことについては、これから臨む教育実習の中で、より実践的に学ぶことが求められる。そのため、教育実習事前指導、さらには振り返りの機会として教育実習事後指導や教職実践演習の授業や担当者との連携を図りながら進めていくことが必要だろう。

最後に今後の見通しを示しておきたい。本稿で検討したのは、今年度まで実施してきた「特別活動論」の授業についてであった。平成29年3月31日に新しい学習指導要領が告示されたものの、本授業は前期（4月～8月）開講授業であり、十分な準備の時間がもてなかったため、今年度の授業では改正された内容に触れつつも、基本的には、平成20年度の「学習指導要領」にしたがって授業を行なった。

ただし、次年度からは平成29年に告示された学習指導要領に基づいて授業を行なっていく予定である。平成29年の改訂の基本方針の一つとして、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進があげられている。こうした授業改善を進めるためには、児童生徒が積極的に「対話」していくことが、量的な面だけでなく、質的な深まりという点でもより重要になってくる（参照『中学校学習指導要領解説 総則編』3-4頁、以下『総則解説』と略記）。

この「児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現を図る」という趣旨の下、「特別活動」では、「よりよい人間関係の形成、よりよい集団生活の構築や社会への参画及び自己実現に資するよう、児童が集団や社会の形成者としての見方・考え方を働かせ、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組む中で、互いのよさや個性、多様な考えを認め合い、等しく

合意形成に関わり役割を担うようにすることを重視すること」が求められている（『総則解説』79-80頁、下線部、引用者補足）。特に、下線を付した「人間関係の形成」、「社会への参画」、「自己実現」の3点については、「特別活動」の目標の中で、育成すべき具体的資質・能力として示されている。

また、学級活動の目標の中には、「学級や学校での生活をよりよくするための課題を見いだし、解決するために話し合い、合意形成し、役割を分担して協力して実践したり、学級での話し合いを生かして自己の課題の解決及び将来の生き方を描くために意思決定して実践したりすることに、自主的、実践的に取り組むことを通して、第1の目標に掲げる資質・能力を育成することを目指す」として、「話し合い」の語が追加されるなどされている（平成29年告示『中学校学習指導要領』第6章の第2〔学級活動〕1.目標）。

「特別活動」は、「生きる力」を育成する上で、「自主的、実践的」に実現する態度を養うという意味で、「総合的で、組織的な価値内容」が含まれており、「非常に重要な教育課程の領域」であったが〔堀井他、2016：10〕、平成29年の改訂では、各教科での学習との関連性が、より具体的に明示されるなど、一層重要性が増しているといえよう。

これまでの「特別活動論」の授業でも、授業づくりの前提として「①生徒主体の話し合い活動にするには」、「②話し合い活動で人間関係を深めるには」についてはふれてきたが、以上のような変更点を鑑み、今後は、教育課程全体とのつながりを意識しながら、この2点について、学生の理解と定着を図っていききたい。その際、教師は、児童生徒に対する指導、すなわち、児童生徒相互の話し合い活動に対してはもちろんのこと、児童生徒にとって身近な大人として、教師自身も児童生徒との双方向的な話し合い、また、それを通じた人間関係づくりが必要不可欠であるろう。

こうした課題については、今後の授業の中で取り組んでいきたい。

注

¹ 平成8（1996）年中央教育審議会第1次答申「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について」で「生きる力」について示された箇所は以下の通り。

我々はこれからの子供たちに必要となるのは、い

かに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力であり、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性であると考えた。たくましく生きるための健康や体力が不可欠であることは言うまでもない。我々は、こうした資質や能力を、変化の激しいこれからの社会を「生きる力」と称することとし、これらをバランスよくはぐくんでいくことが重要であると考えた。

【引用・参考文献一覧】

- 磯島秀樹（2014）「特別活動のあり方についての一考察」『プール学院大学研究紀要』第55号。
- 国立教育政策研究所 教育課程研究センター（2016）『学級・学校文化を創る特別活動【中学校編】』国立教育政策研究所。
- 中央教育審議会、初等中等教育分科会、教育課程部会、特別活動ワーキンググループ（2016）「特別活動ワーキンググループにおける審議の取りまとめについて（報告）」、文部科学省HP、http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/066/sonota/1377088.htm（2017年11月13日閲覧）
- 林 尚示 編著（2016）『特別活動——理論と方法——』学文社。
- 堀井啓幸、山西哲也、坂田 仰 編著（2016）『特別活動の理論と実践』教育開発研究所。松田剛史（2017）「教職課程履修生における特別活動への意識変容とその考察」『藤女子大学人間生活学部紀要』第54号。

Summary

In Japan, it is required to foster 'Zest for Life', at school education. Consequently, the importance of "Special activities" which foster independent and practical abilities, is increasing. However, it is getting harder for experience teachers to impart teaching skills for young teachers, due to busy etc.

Therefore, we need to train university students with practical abilities for "Special activities". For performing this task, we tried to teach by four steps, in lessons of "Extra-curricular Activities".

This measure achieved a certain result for improving actual abilities, e.g., questions to pupils, planning teaching way, and so on.

However, there have been some points of improvements, for example, there questions did not be imaging real pupils much. From now on, we will need to be developed to students more practical abilities through "teaching practice".

Key Words : "Special activities", practical teaching abilities, independence of pupils, discussion, step-by-step learning

(Received November 14, 2017)

本研究は, JSPS科研費26381090, 17K04602の助成を受けたものである.